学ぶ・語る・出会う

社会人ボランティアの声

中野　吉章さん

受講科目

・名著購読「生きがいを考える」

―この授業に出られて、印象はいかがですか？

A.そうですねぇ・・・まずね、学生さんがどんな本を読んでるのか知りたいなぁ。

―と言いますと・・・

A.特に生きがいということを意識して授業をとったわけではないんですが、やっぱり今の学生さんがどんなこと考えているのか、知りたいと思うんですよ。

―何を読んでいるのかということと何を考えているのかということ・・・それはなぜ？

A.やっぱりね、こうして世代も、時代も経験も違うでしょう。それでも、何か共通の受け継がれている土台みたいなものがあるのかってこと、知りたいんだと思いますよ。大学ってそのものが「知の集積の場」でしょう。そこには連綿と受け継がれてきたものってあると思うんですよね。そういう場で、考え方の違いや断絶みたいなものが越えられるのかどうか・・・

―つまり、読み継がれてきた本があるように、大学という場だからこそ存在する受け継がれてきた考え方があるのではないかという・・・

A.そうそう。そういう受け継がれてきたものって、どんな本を読んできたかという視点からも考えることができると思うんですよね。私の学生の頃は、とにかくみんなよく本を読みました。そういう時代だったのかもしれませんが、コミュニケーションの対象としても、議論の対象としても本は中心的存在でしたね。今の学生さんは本を読んでます？？

―うーん・・・この学生支援室も読書の場としても活用できるようにこうやって本を揃えているので・・・少しずつでも読書人口が増えてくれたらって思ってます。

A.あぁ・・・だから授業でも何冊か参考図書として紹介してもらってね。それを読んでくるという土台をつくっておいて、テーマについて話し合うという形もいいんじゃないかなと思いますね。授業の形は双方向性でおもしろいと思うんですよね。

―なるほど・・・中野さんにとって大学の授業とは？
A.大学っていうのは知的興味を大いに追求できる場ですよね。疑問を持った時から始まって、それを解決しようと勉強する。そして知ったときの感動を味わって、また勉強したくなる。それが大学だし、学生時代だと思いますよ。今は実学尊重の風潮っていうのか・・・それがね、ちょっと残念かなぁって。

―連綿と受け継がれてきたもの・・・一つは大学という視点から本を通してお話してくださったのですが、日本人としてのアイデンティティというか、そういうものとして受け継がれていってほしいものってありますか？
A.ありますね・・・それは歴史教育に表れていると思います。私、学生の時に東洋史をやっていたのですが、せめて、大学では近代史入門という辺りまではみんなにやってほしいなぁ。民族としての歴史教育は必要だと思いますね。仕事で中国や韓国、インドネシアなんかにも行きましたけどね。実体験として、歴史教育の必要性を強く感じてます。客観的に事実を知って、考える力が必要だと思いますね。

―ありがとうございました。
最後に・・・「読書人」という言葉を使われた中野さん。読み継がれていってほしい本、またご自分が読んでみたい本とは・・・
A.やっぱり古典ですね。今、古典作品がたくさん新訳で出されてきてます。昔読んだものよりずっとも読みやすくなってますし、視点も違っておもしろいなぁって思います。生協にも情報がでてますよね。ぜひ読んでほしいです。私もできる限り再読をしておきたいと思ってます。

授業への参加はあくまでも自分が勉強したいっていう私サイドの都合なんですよ・・・と笑顔でおっしゃる中野さんです。「知の集積の場」という言葉。大学にふさわしい言葉だと深く感じました。多くの自由な知を蓄積し、循環し、再生する。変化の激しい時にあって、人の土台を支える普遍的な部分を大学が担えるとしたら・・・大学の役割とは、教育とは・・・また考えるきっかけをいただきました。
中野さん、ありがとうございました。

５月１９日（火）　学生支援室にて